

聖書：ガラテヤ 3：23～29

説教題：キリストのもの

日時：2012年11月11日

パウロはガラテヤ人たちに、人が義と認められ、救いの祝福にあずかるのは、律法の行ないによるのか、それとも約束の子孫イエス・キリストを信じる信仰によるのか、を問うています。ガラテヤ人たちはパウロから福音を聞いて信仰に入りましたが、その後でこの地方に入って来たユダヤ主義者たちによって別の立場に移りつつありました。すなわち福音を信じるだけでは不十分であって、真に神の民となるには、ユダヤ人のように割礼を受け、また律法を守る者とならなければならないというものです。そんな立場に迷い出つつあった彼らに、何とか正しい福音の立場に戻って欲しい、とパウロは骨折っています。

今回は「約束」と「律法」の関係についてパウロは論じました。そのポイントは、一旦結ばれた契約は、その後のどんなことによっても修正されたり、無効にされることはないということ。歴史を振り返るなら、アブラハムへの契約は、モーセの律法よりも前に与えられています。ですからアブラハムへの契約に示された「信仰による義」こそ、神が私たち人間を取り扱う際の変わらない方法だとパウロは述べました。では律法にはどんな意味があるのでしょうか。パウロの主張が正しいなら、後から与えられた律法には何の意味も価値もないことになってしまうのではないか。そんな問いに対して、パウロはそこには積極的な良い御心があると述べました。前回最後の22節で語られたように、それはすべての人を罪の下に閉じ込め、イエス・キリストへの信仰へ導くということです。律法は人に義を与えるためのものではなく、むしろこれによって人は義を得られないこと、断罪とさばきしかないと示し、キリストへより良く導くために与えられた。

パウロはそのことを今日の23～24節でまとめています。ここに律法が二つのイメージで語られています。その一つは「牢獄」のイメージです。23節に「律法の監督の下に置かれ」とあります。原文には「監督の」という言葉はなく、「律法の下に置かれ」とだけ記されています。そして「置かれる」という言葉は「監視する」とか「監禁する」という意味の言葉です。その次の「閉じ込められる」という言葉も、ほぼ同じ意味でしょう。つまり信仰が現れるまでは、人は律法の下で監禁され、閉じ込められていた。罪を犯したかどで告発され、責め立てられ、牢屋の中に閉じ込められたような状態にあったということです。

もう一つのイメージは24節の「養育係」です。この養育係とは比較的裕福な家の子どものしつけを担当する人のことです。その多くは雇われた奴隷でした。その養育係は、子どもがある年齢に達して、きちんとした大人の振る舞いができるようになるま

で、日常の生活や行儀作法について教え、訓練する人でした。そのため、その子どもの振る舞いを常に監視し、正しくない点を指摘し、矯正すべきところを矯正する。そのためにはムチを使うこともあったようです。律法はそのように、私たちの問題点を指摘し、ここは正しくない、あそこも正しくない、そこは直さなければならない、それは御心にかなうことではない、と私たちに向かって声を上げ、叱責・警告するようなものなのです。

私たちにとっての幸いは、神はこの圧迫状態を永遠の御心とはされなかったことです。ここでも 19 節と同じように、律法の支配は期間限定のものであることが示されています。23 節最後の部分は「それは、やがて示される信仰が得られるため」と訳されていますが、ここは「やがて示される信仰の時まで」と訳するのが良いと思われます。また 24 節は「律法は私たちをキリストへ導くための養育係」と訳されていますが、「律法はキリストが来る時まで、私たちの養育係であった」と訳するのが良いと思われます。いずれにおいても、律法の支配はある時まで、という期間限定のものであることが強調されています。どうしてそれはある時で終わりになるのでしょうか。それはキリストが私たちに代わって律法の要求をすべて満たして下さったからです。罪を犯して牢屋に閉じ込められたような状態になっていた私たちの代わりにキリストが呪われた者となってくださり、また律法を完全には守れない私たちの代わりに律法を完全に守って、私たちに義を与えてくださったからです。このキリストにより頼み、すがることによって、私たちは律法の支配から自由にされた者、そこから救い出された者となったのです。

このように神はキリストによって律法の圧迫から救ってくださったのに、どうして再び私たちは律法の下に戻って行くべきでしょうか。一体誰がもう一度、牢屋の中に閉じ込められ、監視され、刑に怯える生活をしたいでしょうか。一体誰が私を絶えず監視し、欠点を次々に指摘し、ついには鞭で打ちたたきつけ人の下で生活したいでしょうか。25 節にあるように、信仰が現れた以上、私たちはもはや養育係の下にはいないのです。そこにもう一度戻ることは、神の御心に逆行することであり、私たちに再び苦しみと希望のない状態へ追いやることなのです。

さて、こうしてイエス・キリストへの信仰へと導かれた私たちは、キリストにあってどんな祝福へ導き入れられているのか、より積極的な面についてパウロは続けて語ります。彼は 26 節以降で 3 つの祝福について語ります。その第一は「神の子ども」ということです。この「神の子ども」について考える時、私たちが思い巡らすべきは、神の子どもとは何よりもイエス・キリストを指しているということです。ただこの方だけが神の家における神の子どもです。そして私たちはこのまことの神の子と結び合わされることを通して、神の子どもの特権にあずかるのです。ですから 26 節の「あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。」という言

葉の意味は、私たちはこの方への信仰によって、この方が持っている独特な神の子どもの立場に引き上げられるということなのです。これは何という特権でしょうか。私たちは何と、聖なる神の家族の一員にさせられるのです。またキリストが父なる神から永遠の昔からの特別な愛で愛されているように、それと同じ立場に入れられ、同じように神に愛される者となるということです。

パウロはこのことを手紙の読者たちに確信させるために、彼らが洗礼を受けた者であることを 27 節で思い起こさせます。もちろん洗礼それ自体が、その人を神の子どもにするものではありません。しかし洗礼はその人がキリストと結ばれた者であることを目に見える形で表わすものです。ともすると、私たちはこんな自分が本当に神の家族に入れられているのか、本当にイエス・キリストと同じ神の子どもの立場に立たせて頂いているのか、とても信じられないことのように思いますが、パウロはそんな彼らに、あなたがたはバプテスマを受けた者であって、キリストと一つに結ばれた者であるということを思い起こさせているのです。「キリストをその身に着た」と表現されるほど、キリストとの深い一体的結合へと導かれた者である。それゆえ、あなたがたは本当にキリストにあって、神の子どもという特権に導き入れられている、とパウロは言っているのです。

キリストへの信仰によって与えられる祝福の二つ目、それは 28 節にあります。先の一つ目は、神との関係、縦の関係に属することですが、こちらは私たちの互いの関係、いわば横の関係に関することです。ここに三つの組み合わせが出て来ます。ユダヤ人とギリシヤ人、奴隷と自由人、男子と女子。このような私たちの間にある様々な区別や違いは、ともすると私たちの交わりに分断を生じさせます。お互いに相争い、自分を主張し、他方を見下し、憎しみと敵意を持って散り散りバラバラになるということが起きやすい。しかしキリストはお一人であって、そのキリストに結ばれている人たちは一つでなければおかしいはずです。キリストのもとに来るまでは、それぞれ自分を誇り、他者を見下して生活をしていたかもしれませんが、キリストのもとに来る人は、自分に誇れるものは何もなく、ただキリストの恵みによって救いを頂いた貧しい人間であることを告白する人です。ですからその人々は誰一人自己主張せず、ただキリストに感謝し、キリストをたたえることで一つになれるはずです。キリストこそ、私たちの間の隔ての壁を打ち壊し、二つのものを新しい一人の人に造り上げて、平和を実現してくださる主です。

私たちは、この主にある兄弟姉妹との一つの交わりの祝福に生きているのでしょうか。前に長老教会のアジア宣教体験ツアーでフィリピンに行った時に驚いたことの一つは、貧しい人たちの教会と富んでいる人たちの教会ははっきり分かれていたことです。両者の住んでいる地域ははっきりと分かれ、クリスチャンでも同じ教会では礼拝できないそうです。私たちの一行は T シャツにジーパン姿、そしてリュックサックを背負っ

たような、見た目からして貧しい集団でしたので、貧しい教会また中流の教会にまでは参加できましたが、上流階級の教会には入ることができませんでした。またアメリカでも皮膚の色の違いが、まだまだお互いの交わりを妨げている現実があると聞きます。いや私たちの日本でも、生活レベルの差、知的レベルの差、あるいは文化の違いなどが、いつの間にか交わりを妨げる要因になっているとは良く聞く話です。しかしキリストはご自身においてあらゆる人種、身分、性の違いを乗り越える一致の祝福に私たちを生かしてくださるお方です。私たちは自らの歩みを振り返り、キリストの御心をわきまえ知って、益々この祝福に生きる者となるように、そしてこの祝福がさらに広がるために自らをささげて歩みたいと思います。

キリストにある祝福の三つ目は、29節にある「アブラハムの子孫」ということです。この「アブラハムの子孫」という言葉は、3章16節で、特にキリストお一人を指す言葉として語られました。その言葉が今度は私たちには当てはめられています。これはどう考えたら良いのでしょうか。それは29節の「もしあなたがたがキリストのものであれば」という部分に説明されています。すなわちキリストこそ、アブラハムの子孫なるお方ですが、そのキリストに結ばれ、キリストのものにされることによって、あなたがたもアブラハムの子孫になるということです。ここにはどんな意味があるでしょう。この手紙の受取人であるガラテヤ人は異邦人でした。彼らはユダヤ主義者たちから、割礼を受け、律法を守る者になってこそ、アブラハムの子孫になると教えられていました。しかしパウロは、違うと言っているのです。彼はキリストと結ばれることによって、アブラハムの子孫になると言っているのです。そしてこのキリストに結ばれてこそ、神がアブラハムに約束された祝福のすべてを相続する者になると言っているのです。それは律法を守ることによってではなく、キリストに結ばれることによって与えられる特権なのだ、と言っているのです。

私たちは果たして自分をどこに置く者でしょうか。律法の下にでしょうか。それともキリストへの信仰に導かれて、この方との結合の内にでしょうか。律法の下では、圧迫、束縛、そして断罪と滅びしかありません。しかしキリストのもとにあっては、それら一切から解放されるばかりか、「神の子ども」「キリストにある一つ交わり」「アブラハムの子孫として約束の相続人」となる道が開かれています。この豊かな祝福へと導かれた私たちが、律法による義を付け加えようとして、逆戻りすることがありませんように。せつかく与えられた自由の祝福を投げ捨てて、再び牢屋の生活に戻ることがありませんように。私たちの違反を指摘し、鞭を振り上げる養育係の下での生活に戻ることがありませんように。律法は私たちをキリストへの信仰へと導くためのものです。今や自分はキリストへの信仰へと導かれ、これらの圧迫から解放されたことを喜び、さらに神の子ども、一つ交わり、アブラハムの子孫という祝福に入れられていることを十二分に満喫して、神とキリストにすべての栄光と賛美を帰す歩みへ導かれて行きたいと思います。